「井伊大老桜田門外一件書状写」

（森田家文書№４６８９）

【翻刻】

（端裏書）

安政七庚申年三月三日御登城之砌
御大老井伊掃部頭様一条蜜（ママ）書松平大
和守様
江戸御屋敷御留主居ゟ川越江
御書送り被成候書状写

三月三日之朝六ツ時過御留主
居役誰殿当日之御祝義御役家
御使者罷出候所、御老中方迄、勤
禮（礼）を仕舞、井伊殿江参り掛候
處（処）、桜田御門外松平市正殿裏門
前、何者共不知侍躰（体）之もの四人
切殺され相倒れ居、其際ニ腕
弐本切捨并駕籠切除ヶ抔切落シ
有之、近辺雪中夥敷血流罷在
不怪体ニ候得共、聢与いたし候處者
相分り不申、井伊殿江罷越途中
ニも所々又血流居候、門内江入所
殊之外不穏様子ニ而侍拾人計り
銘々ニ鎗を携居供頭躰之者
大手疵と相見へ血ニ染り両三人
之もの之肩ニ掛り罷在候由、
依之早々玄関江罷越当日之
祝義申延（ママ）罷在候内、取次之者
抔仰天いたし居候躰ニ而有候
由、辰ノ刻比ニ有之、右ニ付風聞承り候
候（ママ）處、井伊殿御登城被致候節、外
桜田松平市正殿屋敷近辺迄
罷越候處、大雪寒中ニ桐油を
着し候者十六人程御先供并駕
籠脇江かゞみ出候由、駕訴致候
ものかと相見へ候處、弥々そばへ
進み寄桐油迄はぎ候へ者、下ニは
何れ（連）も白布ニ而体巻いたし、
たすきを掛ヶ忽駕脇之
侍両三人一同ニ切伏暫時相戦
候處、其内發聲（発声）いたし、右
十六人之者そこ〳〵離散、其内
壱人生首を提ヶ血刀ニ而日々
谷御門ゟ八代洲河岸通りへ
逃（逃）出候所、伊井（ママ）殿ハ直々御屋敷へ
御引送り、駕籠之内別条之
有無相分不申候内、拾六人之内
四人脇坂殿へ欠込拾六人連名ヲ
差出し申候由、委細之事者未相
分り不申候得共、大変成義出来
申、井伊殿ニ者御駕籠ゟ引出し
首を刎候とも又者刀ニ而差殺
候とも申候

松平修理大夫家来
有田治右衛門
水戸殿家来
佐野弁之助
正口辰之助　黒沢忠次郎
森元六九郎　大関梨次郎
杉山弥市郎　廣岡子之次郎
蓮方又市　斎藤所之助
鯉渕要八
廣木松之助
稲田市蔵
増子金八
関鉄之助
代後徳之助

當（当）三日及狼藉候得共、名前之所十六人
之内四人脇坂様江願書持参申候内、
弐人之死體（体）掃部頭様御引取、
内壱人遠藤様辻番所江相遣し
申、増子様辻番所ニ右之者残り
候而十六人逃去申候、右之通取調申候、
以上
右書面極内々ニ而御披見御焼失
可被成候、以上
安政七庚申三月十六日朝写